

# 第 1 章

## 楕円曲線とテータ関数

### 1.1 楕円曲線

Definition 1.1.1. (楕円曲線)

パラメータ  $\lambda \in \mathbb{C} \setminus \{0, 1\}$  に対して, 曲線  $C(\lambda) \subset \mathbb{P}^2$  を

$$C(\lambda) = \{[\zeta_0 : \zeta_1 : \zeta_2] \in \mathbb{P}^2 \mid \zeta_2^2 \zeta_0 = \zeta_1(\zeta_1 - \zeta_0)(\zeta_1 - \lambda \zeta_0)\}$$

で定め,  $C(\lambda)$  の  $U_0 = \{\zeta_0 \neq 0\}$  へのアファイン化を

$$C_0(\lambda) = \{(v, w) \in \mathbb{C}^2 \mid w^2 = v(v-1)(v-\lambda)\}$$

と表す.

Remark 1.1.2.

直線  $\zeta_0 = 0$  は  $C(\lambda)$  と  $P_\infty$  でのみ交わる. 即ち,  $C(\lambda) \setminus C_0(\lambda) = \{P_\infty = [0 : 0 : 1]\}$  である. 実際,

$$\begin{cases} \zeta_2^2 \zeta_0 = \zeta_1(\zeta_1 - \zeta_0)(\zeta_1 - \lambda \zeta_0) \\ \zeta_0 = 0 \end{cases}$$

を解くと,  $\zeta_1^3 = 0$  となり,  $P_\infty$  は重複度 3 の点となることから  $\zeta_0 = 0$  と  $C(\lambda)$  の交点は  $P_\infty$  のみから成る.

$P(u, v) = v^2 - u(u-1)(u-\lambda)$  とおくとき,  $\partial P / \partial v = 2v$  より,  $P(a, b) = P_v(a, b) = 0$  となる点  $(a, b) \in \mathbb{C}^2$  は,  $(a, b) = (0, 0), (1, 0), (\lambda, 0)$  である.  $S = \{0, 1, \lambda\}$  とおく. また,  $\mathcal{X} = \{(u, v) \in (\mathbb{C} \setminus S) \times \mathbb{C} \mid P(u, v) = 0\}$  とおく. これは Riemann 面である.

Proposition 1.1.3.

第 1 射影<sup>a</sup>  $\text{pr}_1: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{C} \setminus S = \mathbb{P}^1 \setminus (S \cup \{\infty\}); (u, v) \mapsto u$  は  $C(\lambda)$  上の固有正則写像  $\text{pr}: C(\lambda) \rightarrow \mathbb{P}^1$  に拡張される.

<sup>a</sup> これは固有な局所同相写像

Proof.

今野 [今 15] 命題 4.15 を適応せよ.

□

Proposition 1.1.4.

$C(\lambda)$  の種数は 1 であり, 正則写像  $\text{pr}$  は  $P_0 = [1 : 0 : 0], P_1 = [1 : 1 : 0], P_\lambda = [1 : \lambda : 0], P_\infty = [0 : 0 : 1]$  で分岐する二重被覆である.

Proof.

今野 [今 15] 例 4.16 によると,  $w^2 - z(z - \lambda)(z - 1)$ ,  $\lambda \neq 0, 1$  より  $C(\lambda)$  の種数 1 であり,  $\text{pr}$  は  $z = 0, \lambda, 1, \infty$  で分岐する二重被覆である.

具体的に局所座標と局所表示を求める.

$U_0$  上,  $z = \frac{\zeta_1}{\zeta_0}, w = \frac{\zeta_2}{\zeta_0}$  とすれば,  $z \neq 0, \lambda, 1$  のとき  $w \neq 0$  であることから  $z$  が局所座標となる.  $z = 0, \lambda, 1$  のとき,  $z_j = z - j$ ,  $j = 0, \lambda, 1$  とすれば,

$$w_j = \frac{w}{\sqrt{z(z - \lambda)(z - 1)}}$$

とおけば,  $|z_j|$  が十分小さいとき,  $w_j^2 = z_j$  となることから  $w_j$  が局所座標となる.

$C(\lambda) \setminus C_0(\lambda) = \{P_\infty\}$  であるから,  $[\zeta_0 : \zeta_1 : \zeta_2] = [0 : 0 : 1]$  の周りの局所座標のみ与えればよい.  $u = \zeta_0/\zeta_1$ ,  $t = \zeta_2/\zeta_1$  とすれば,  $\zeta_2^2\zeta_0 = \zeta_1(\zeta_1 - \zeta_0)(\zeta_1 - \lambda\zeta_0)$  は  $u = t(t - u)(t - \lambda u)$  となる.  $g(u, t) = u - t(t - u)(t - \lambda u)$  は  $g_u(0, 0) = 1 - 2\lambda ut + (1 + \lambda)t^2|_{u=t=0} = 1 \neq 0$  より陰関数定理から  $t$  は  $(u, t) = (0, 0)$  の周りの局所座標となっていて,  $u = c_\infty t^3 + O(t^4)$ ,  $c_\infty \neq 0$  と展開される. 従って  $t$  が局所座標となる.

以上により,  $\text{pr}$  の ramification point は,  $P_0 = [1 : 0 : 0], P_1 = [1 : 1 : 0], P_\lambda = [1 : \lambda : 0], P_\infty = [0 : 0 : 1]$  であり, branched point は,  $\text{pr}(P_0) = [1 : 0], \text{pr}(P_1) = [1 : 1], \text{pr}(P_\lambda) = [1 : \lambda]$  であり,  $\text{pr}(P_\infty) = [0 : 1]$  である. また, 分岐指数はそれぞれ 2 である. これによって  $(\text{pr}, C(\lambda))$  は  $P_0, P_1, P_\lambda, P_\infty$  で分岐する  $\mathbb{P}^1$  の二重被覆であることがわかる.  $\square$

Remark 1.1.5.

自己同相写像  $f: C(\lambda) \rightarrow C(\lambda)$  で  $\text{pr} = \text{pr} \circ f$  を満たすものを被覆変換という. また, 被覆変換全体  $\text{Deck}(C(\lambda)/\mathbb{P}^1)$  は写像の合成によって群になり, これを被覆変換群という.

双正則写像

$$\rho: C(\lambda) \rightarrow C(\lambda); [\zeta_0 : \zeta_1 : \zeta_2] \rightarrow [\zeta_0 : \zeta_1 : -\zeta_2]$$

は被覆変換であり,  $\rho \circ \rho = \text{id}_{C(\lambda)}$ ,  $\rho(P_j) = P_j$  ( $j = 0, 1, \lambda, \infty$ ) を満たす.

## 1.2 $C(\lambda)$ 上の微分形式

$g(C(\lambda)) = 1$  より,  $\dim_{\mathbb{C}} \Omega^1(C(\lambda)) = 1$  であるから, 1 つ 1-形式を見つければ  $C(\lambda)$  上の正則微分は全てその定数倍で書ける.

Proposition 1.2.1.

$C_0^\circ(\lambda) = C_0(\lambda) \setminus \{P_0, P_1, P_\lambda\}$  上で定義された 1-形式

$$\varphi = \frac{dv}{w} = \frac{dv}{\sqrt{v(v-1)(v-\lambda)}}$$

は非零な  $C(\lambda)$  上の 1-形式に  $\varphi$  拡張される.

Proof.

$v \neq 0, 1, \lambda$  なら,  $w \neq 0$  であるから,  $C_0^o(\lambda)$  上  $\varphi \neq 0$  である.  $P_j$  ( $j = 0, 1, \lambda$ ) の周りでは,  $v - j = c_j w^2 + O(w^3)$  ( $c_j \neq 0$ ) と展開されることから,

$$\frac{dv}{w} = \frac{1}{w} \frac{dv}{dw} dw = (2c_j + O(w^2)) dw$$

と表される. 従って,  $C_0(\lambda)$  上  $\varphi$  は非零な正則微分である.  $C(\lambda)$  は無限遠  $P_\infty$  で局所座標  $t$  によって,  $u = c_\infty t^3 + O(t^4)$  と展開されるのであった.  $v = t/u, w = 1/u$  より,  $P_\infty$  の近傍で  $\varphi$  は

$$\begin{aligned} \varphi &= ud \left( \frac{t}{u} \right) \\ &= (c_\infty t^3 + O(t^4)) \frac{d}{dt} \left( \frac{t}{(c_\infty t^3 + O(t^4))} \right) \\ &= (c_\infty t^3 + O(t^4)) \left( \frac{1}{(c_\infty t^3 + O(t^4))} - t \frac{3c_\infty t^2 + O(t^3)}{(c_\infty t^3 + O(t^4))^2} \right) \\ &= 1 - \frac{3c_\infty t^3 + O(t^4)}{c_\infty t^3 + O(t^4)} \end{aligned}$$

と表される. 従って  $\varphi(P_\infty) = (1 - 3)dt = -2dt \neq 0$  であるから  $\varphi$  は  $C(\lambda)$  上非零な正則微分である.<sup>\*1</sup> □

### 1.3 1 次ホモロジー群 $H_1(C(\lambda), \mathbb{Z})$ のシンプレクティック基底

$\lambda$  によって定まる  $H_1(C(\lambda), \mathbb{Z})$  のシンプレクティック基底を定める.  $P_0 \in C_0(\lambda)$  を  $C(\lambda)$  の基点とする. まず,  $\lambda \in (0, 1)$  に対して定める.

$\ell_{\infty,0}, \ell_{0,\lambda}, \ell_{\lambda,1}, \ell_{1,\infty}$  をそれぞれ,  $P_i$  から  $P_j$  への曲線で次を満たすものとする:  $\text{pr}(\ell_{i,j}([0, 1])) = [i, j]$ ,  $(i, j) = (\infty, 0), (0, \lambda), (\lambda, 1), (1, \infty)$ <sup>\*2</sup> かつ, これらの曲線の  $w = \sqrt{v(v - \lambda)(v - 1)}$  における偏角が次の表 1.1 で与えられる<sup>\*3</sup>.

$v$	$-\infty$	$\ell_{\infty,0}$	$0$	$\ell_{0,\lambda}$	$\lambda$	$\ell_{\lambda,1}$	$1$	$\ell_{1,\infty}$	$\infty$
$\arg(v)$	*	$\pi$	*	$0$	$0$	$0$	$0$	$0$	*
$\arg(v - \lambda)$	*	$\pi$	$\pi$	$\pi$	*	$0$	$0$	$0$	*
$\arg(v - 1)$	*	$\pi$	$\pi$	$\pi$	$\pi$	*	$0$	$0$	*
$\arg(w)$	*	$\frac{3\pi}{2}$	*	$\pi$	*	$\frac{\pi}{2}$	*	$0$	*

表 1.1  $\arg(w)$

即ち,  $\ell_{\infty,0}, \ell_{1,\infty}$  は  $w$  上  $\sqrt{1} = 1$  となる分枝で,  $\ell_{0,\lambda}, \ell_{\lambda,1}$  は  $w$  上  $\sqrt{1} = -1$  となる分枝である. こうして得られた曲線によって  $H_1(C(\lambda), \mathbb{Z})$  のシンプレクティック基底  $A, B$  を構成する: Remark 1.1.5 で与えられた被覆変換  $\rho$  によって終点が  $P_0 = [1 : 0 : 0]$  であるような曲線  $A, B$  を

$$A = \ell_{\infty,0} \cdot (-\rho(\ell_{\infty,0})), \quad B = (-\ell_{0,\lambda}) \cdot \rho(\ell_{0,\lambda})$$

と定める. ただし, 曲線  $c_1, c_2$  に対して, 曲線  $c_2 \cdot c_1$  を

$$c_2 \cdot c_1(t) = \begin{cases} c_1(2t) & 0 \leq t \leq \frac{1}{2} \\ c_2(2t - 1) & \frac{1}{2} \leq t \leq 1 \end{cases}$$

<sup>\*1</sup> 正則微分の空間  $\Omega^1(X)$  の基底は共通零点を持たないことから,  $\varphi$  は零点を持たない.

<sup>\*2</sup>  $\ell_{i,j}$  の  $\text{pr}$  による像が  $\mathbb{P}^1$  の各平面の実軸にあることだと思う.

<sup>\*3</sup> 各曲線を上半平面  $\mathbb{H}$  を通じて解析接続することにより表の偏角が得られる.

で定める. これを

$$A = (1 - \rho) \cdot \ell_{\infty,0}, \quad B = -(1 - \rho) \cdot \ell_{0,\lambda}$$

と表す.  $-B \cdot A$  は 0 の周りを負の方向に周る閉曲線となるから, 交点数は  $-B \cdot A = -1$  となる. よって  $A \cdot B = -1$  となることから交点行列は,

$$\begin{pmatrix} A \cdot A & A \cdot B \\ B \cdot A & B \cdot B \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & -1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}$$

となり,  $A, B$  は  $H_1(C(\lambda), \mathbb{Z})$  のシンプレクティック基底である.

任意の  $\lambda \in \mathbb{C} \setminus \{0, 1\}$  に対して  $A, B$  を定める.  $(0, 1)$  のある一点に対して定まる  $\ell_{j,k}$  と  $A, B$  を  $\lambda$  への曲線によって解析接続することにより定める. これは経路の取り方によるが, 周期の違いを除けば一意に定まる.

## 1.4 Abel-Jacobi 写像

これまでで得られたシンプレクティック基底  $A, B$  と正則微分の空間の基底  $\varphi$  によって Abel-Jacobi 写像を定義していく. これらの基底に関する周期行列は,

$$\Pi = \begin{pmatrix} \tau_A \\ \tau_B \\ 1 \end{pmatrix}, \quad \tau_A = \int_A \varphi, \quad \tau_B = \int_B \varphi$$

であり, Riemann の双線形関係<sup>\*4</sup> から  $\tau = \frac{\tau_A}{\tau_B}$  は  $\text{Im}(\tau) > 0$  を満たす.

**Definition 1.4.1.** (Abel-Jacobi 写像, 周期写像)

$\lambda \in \mathbb{C} \setminus \{0, 1\}$  に対して定まるシンプレクティック基底  $A, B$  と正則微分  $\varphi$ , 周期行列

$$\Pi = \begin{pmatrix} \tau \\ 1 \end{pmatrix}, \quad \tau_A = \int_A \varphi, \quad \tau_B = \int_B \varphi, \quad \tau = \frac{\tau_A}{\tau_B}$$

を取り,  $L_\tau = \mathbb{Z}\tau + \mathbb{Z}$  とするとき, Abel-Jacobi 写像を

$$j: C(\lambda) \rightarrow \mathbb{C}/L_\tau = E_\tau; P \mapsto \frac{1}{\tau_B} \int_{P_0}^P \varphi$$

と定める. これは  $P_0$  から  $P$  への経路の取り方の違いから出る積分は  $L_\tau$  に入るため well-defined である.

また, 各  $\lambda \in \mathbb{C} \setminus \{0, 1\}$  に対して  $\tau$  が定まったことから, 周期写像を

$$\text{per}: \mathbb{C} \setminus \{0, 1\} \rightarrow \mathbb{H}; \lambda \mapsto \tau$$

と定める. ただしこれは  $(0, 1)$  から  $\lambda$  への解析接続による違いがあるため多価関数である.

### Remark 1.4.2.

種数  $g > 0$  の閉 Riemann 面上の Abel-Jacobi 写像は全射かつ埋め込みになっていたことから  $j$  は全単射正則写像であり, 周期写像  $\text{per}$  は単射であった [今 15]. 従って,  $C(\lambda)$  は Abel-Jacobi 写像を通して複素トーラス  $E_\tau$  に Riemann 面として同型である. 従って,  $z \in E_\tau$  に対して,  $j(P) = z$  を満たす  $P = (u, v) \in C(\lambda)$ <sup>\*5</sup> となるものが唯一存在する.

<sup>\*4</sup> 一般に種数  $g$  の閉 Riemann 面上のシンプレクティック基底と正規基底から定める周期行列  $\Pi$  は,  $\Pi = \begin{pmatrix} Z \\ I_g \end{pmatrix}$  であり, Riemann の双線形関係は  $Z - {}^t Z = O_g, i(\bar{Z} - {}^t Z) > 0$  である.

<sup>\*5</sup>  $U_0$  や  $U_2$  で  $\mathbb{C}^2$  と同一視している

Theorem 1.4.3.

Abel-Jacobi 写像の逆写像  $j^{-1}: E_\tau \rightarrow C(\lambda); z \mapsto (v, w)$  は、テータ関数を用いて

$$v = \frac{\vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^2 \vartheta_{[1,1]}(z, \tau)^2}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^2 \vartheta_{[0,1]}(z, \tau)^2}, \quad (1.1)$$

$$w = -\frac{\vartheta_{[0,1]}(0, \tau)^2 \vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^2 \vartheta_{[0,0]}(z, \tau) \vartheta_{[1,0]}(z, \tau) \vartheta_{[1,1]}(z, \tau)}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^4 \vartheta_{[0,1]}(z, \tau)^3} \quad (1.2)$$

と表される.

また, 周期写像  $\text{per}$  の逆写像  $\text{per}^{-1}: \text{per}(\mathbb{C} \setminus \{0, 1\}) \rightarrow \mathbb{C} \setminus \{0, 1\}$  は,

$$\lambda = \frac{\vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^4}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^4} \quad (1.3)$$

によって与えられる.

Proof.

まず,  $j(P_j)$  を求める.  $P_0$  は Abel-Jacobi 写像の基点であったため,  $j(P_0) \equiv 0$  であることは明らかである.

$\rho$  によってもう一つの分枝に写るとき,  $\sqrt{z}$  は  $-\sqrt{z}$  になることに注意すると,

$$\begin{aligned} \int_A \varphi &= \int_{(1-\rho) \cdot \ell_{\infty,0}} \varphi = 2 \int_{-\ell_{\infty,0}} \varphi \\ \int_B \varphi &= \int_{(\rho-1) \cdot \ell_{0,\lambda}} \varphi = 2 \int_{\ell_{0,\lambda}} \varphi \end{aligned}$$

より,

$$\begin{aligned} \int_{P_0}^{P_\infty} \varphi &= \frac{\tau_A}{2} \\ \int_{P_0}^{P_\lambda} \varphi &= \frac{\tau_B}{2} \end{aligned}$$

であるから,

$$\begin{aligned} j(P_\lambda) &= \frac{1}{\tau_B} \int_{P_0}^{P_\lambda} \varphi = \frac{1}{2} \\ j(P_\infty) &= \frac{1}{\tau_B} \int_{P_0}^{P_\infty} \varphi = \frac{1}{\tau_B} \frac{\tau_A}{2} = \frac{\tau}{2} \end{aligned}$$

である. また,  $(1-\rho) \cdot \ell_{\lambda,1}$  は  $B$  とのみ交点を持つことから,  $H_1(C(\lambda), \mathbb{Z})$  のサイクルとして  $(1-\rho) \cdot \ell_{\lambda,1} = -A$ <sup>\*6</sup> であるから,

$$\int_{-A} \varphi = \int_{(1-\rho) \cdot \ell_{\lambda,1}} \varphi = 2 \int_{P_\lambda}^{P_1} \varphi$$

より,

$$\int_{P_\lambda}^{P_1} \varphi = -\frac{1}{2} \int_A \varphi = -\frac{\tau_A}{2} \equiv \frac{\tau_A}{2}$$

---

<sup>\*6</sup> 1 を始点とするサイクル

従って,

$$\begin{aligned} j(P_1) &= \frac{1}{\tau_B} \int_{P_0}^{P_1} \varphi \\ &= \frac{1}{\tau_B} \left( \int_{P_0}^{P_\lambda} + \int_{P_\lambda}^{P_1} \right) \varphi \\ &= j(P_\lambda) + \frac{1}{\tau_B} \frac{\tau_A}{2} = \frac{1+\tau}{2} \end{aligned}$$

である. 以上により,

$$j(P_0) = 0, \quad j(P_\lambda) = \frac{1}{2}, \quad j(P_\infty) = \frac{\tau}{2}, \quad j(P_1) = \frac{1+\tau}{2}$$

を得る.

$U_0$  上の局所座標  $(v, w)$  は  $(v, w) = (0, 0)$  の周りで,  $v = cw^2 + O(w^3)$ ,  $c \neq 0$ ,  $U_2$  上の局所座標  $(u, t)$  は  $(u, t) = (0, 0)$  の周りで  $u = t/u = t/(c_\infty t^3 + O(t^4))$ ,  $c_\infty \neq 0$  と展開できたことから,  $v$  を  $P_0$  で 2 位の零を持ち,  $P_\infty$  で 2 位の極を持つ有理型関数と見做す.  $\vartheta_{[1,1]}(z, \tau)$  は  $z = 0 (= j(P_0))$  とで 1 位の零を持ち,  $\vartheta_{[0,1]}(z, \tau)$  は  $z = \frac{\tau}{2} (= j(P_\infty))$  で 1 位の零を持つのであった.

$$h(z, \tau) = \frac{\vartheta_{[1,1]}(z, \tau)^2}{\vartheta_{[0,1]}(z, \tau)^2}$$

は,  $\vartheta_{a,b}(z+1, \tau) = \exp(2\pi ia)\vartheta_{a,b}(z, \tau)$ ,  $\vartheta_{a,b}(z+\tau, \tau) = \exp(-2\pi ib)\exp(-\pi i(\tau+2z))\vartheta_{a,b}(z, \tau)$  より,  $h(z+p\tau+q, \tau) = h(z, \tau)$  ( $p, q \in \mathbb{Z}$ ) を満たすことから  $E_\tau$  上の有理型関数と見做すことができる. これを Abel-Jacobi 写像  $j$  によって引き戻し  $C(\lambda)$  上の有理型関数だと思ふと,

$$v = c_v \frac{\vartheta_{[1,1]}(j(P), \tau)^2}{\vartheta_{[0,1]}(j(P), \tau)^2}$$

となる定数  $c_v \in \mathbb{C}$  が取れる. この定数  $c_v$  を確定させる.  $j(P_1) = (1+\tau)/2$ ,  $P_1 = (1, 0) \in C_0(\lambda)$  より,

$$\begin{aligned} 1 &= c_v \frac{\vartheta_{[1,1]}(\frac{1+\tau}{2}, \tau)^2}{\vartheta_{[0,1]}(\frac{1+\tau}{2}, \tau)^2} \\ \iff c_v &= \frac{\vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^2}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^2} \end{aligned}$$

よって,

$$v = \frac{\vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^2 \vartheta_{[1,1]}(z, \tau)^2}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^2 \vartheta_{[0,1]}(z, \tau)^2}$$

を得る.

$P_\lambda = [1 : \lambda : 0]$  より,  $\lambda = v|_{P_\lambda}$  であるから,  $z = j(P_\lambda) = \frac{1}{2}$  を代入すると,

$$\lambda = \frac{\vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^2 \vartheta_{[1,1]}(\frac{1}{2}, \tau)^2}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^2 \vartheta_{[0,1]}(\frac{1}{2}, \tau)^2} = \frac{\vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^4}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^4}$$

を得る.

$w$  を  $P_0, P_\lambda, P_1$  で 1 位の零を持ち,  $P_\infty$  で 3 位の極を持つ<sup>\*7</sup>  $E_\tau$  上の有理型関数と見做す.  $v$  のときと同様,

$$\frac{\vartheta_{[0,0]}(z, \tau) \vartheta_{[1,0]}(z, \tau) \vartheta_{[1,1]}(z, \tau)}{\vartheta_{[0,1]}(z, \tau)^3}$$

---

<sup>\*7</sup>  $U_2$  で  $w = 1/u$ ,  $u = c_\infty t^3 + O(t^4)$  という表示を持つことから従う.

は  $C(\lambda)$  上の有理型関数と見做すと,

$$w = c_w \frac{\vartheta_{[0,0]}(j(P), \tau) \vartheta_{[1,0]}(j(P), \tau) \vartheta_{[1,1]}(j(P), \tau)}{\vartheta_{[0,1]}(j(P), \tau)^3}$$

を満たす定数  $c_w \in \mathbb{C}$  が取れる. これを求める.  $w^2 = v(v - \lambda)(v - 1)$  に代入すると,

$$\begin{aligned} c_w^2 \frac{\vartheta_{[0,0]}(z, \tau)^2 \vartheta_{[1,0]}(z, \tau)^2 \vartheta_{[1,1]}(z, \tau)^2}{\vartheta_{[0,1]}(z, \tau)^6} \\ = \frac{\vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^2 \vartheta_{[1,1]}(z, \tau)^2}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^2 \vartheta_{[0,1]}(z, \tau)^2} (v - \lambda)(v - 1) \\ \iff c_w^2 \frac{\vartheta_{[0,0]}(z, \tau)^2 \vartheta_{[1,0]}(z, \tau)^2}{\vartheta_{[0,1]}(z, \tau)^4} = \frac{\vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^2}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^2} (v - \lambda)(v - 1) \end{aligned}$$

より,  $z \rightarrow 0$  と極限を取ると,  $\vartheta_{[1,1]}(0, \tau) = 0$  より,  $v \rightarrow 0$  であるから,

$$c_w^2 \frac{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^2 \vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^2}{\vartheta_{[0,1]}(0, \tau)^4} = \frac{\vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^2}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^2} \lambda$$

となり,

$$\begin{aligned} c_w^2 &= \frac{\vartheta_{[0,1]}(0, \tau)^4}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^2 \vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^2} \frac{\vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^2}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^2} \lambda \\ &= \frac{\vartheta_{[0,1]}(0, \tau)^4}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^4} \lambda = \frac{\vartheta_{[0,1]}(0, \tau)^4}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^4} \frac{\vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^4}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^4} = \frac{\vartheta_{[0,1]}(0, \tau)^4 \vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^4}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^8} \end{aligned}$$

を得る. よって,

$$c_w = \pm \frac{\vartheta_{[0,1]}(0, \tau)^2 \vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^2}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^4}$$

を得る. 符号を確定させればよい.  $\lambda \in (0, 1)$  と  $P = (v_1, w_1)$  を  $\ell_{0,\lambda}$  の端点以外から取る. このとき,  $w_1^2 = v_1(v_1 - \lambda)(v_1 - 1) > 0$  より,  $w_1 \in \mathbb{R}$  であり, 表 1.1 から,  $\arg(w) = \pi$  であるから,  $w_1 < 0$  となる.  $\tau_A$  は純虚数であり,  $\tau_B \in \mathbb{R}$  であるため,  $\tau = \tau_A/\tau_B$  は純虚数となる. また,  $j(P) = z_1$  と表すと,

$$z_1 = \int_{P_0}^P \varphi = \frac{1}{\tau_B} \int_0^{v_1} \frac{-dv}{\sqrt{v(v - \lambda)(v - 1)}}$$

は

$$0 < \int_0^{v_1} \frac{dv}{\sqrt{v(v - \lambda)(v - 1)}} < \int_0^\lambda \varphi = \tau_B$$

より,  $-1 < z_1 < 0$  を満たす.

$$\vartheta_{p,q}(z, \tau) = \sum_{n \in \mathbb{Z}} \exp(\pi i(n + p)^2 \tau + 2\pi i(n + p)(z + q))$$

より,  $p, q \in \{0, \frac{1}{2}\}$  のとき,

$$\vartheta_{[p,q]}(0, \tau) = \sum_{n \in \mathbb{Z}} \exp(\pi i(n + p)^2 \tau + 2\pi i(n + p)q)$$

であるから,

$$\pi i(n + p)^2 \tau + 2\pi i(n + p)q = \begin{cases} \pi i n^2 \tau & [p, q] = [0, 0] \\ \pi i(n^2 + n + \frac{1}{4})\tau & [p, q] = [1, 0] \\ \pi i(n^2 \tau + n) & [p, q] = [0, 1] \end{cases}$$

より,  $\tau$  が純虚数の場合,  $\exp(\pi i(n+p)^2\tau + 2\pi i(n+p)q) > 0$  となり,  $\vartheta_{[0,0]}(0, \tau), \vartheta_{[0,1]}(0, \tau), \vartheta_{[1,0]}(0, \tau) \in \mathbb{R}_{>0}$  となる. また,

$$\vartheta_{p,q}(z_1, \tau) = \sum_{n \in \mathbb{Z}} \exp(\pi i(n+p)^2\tau + 2\pi i(n+p)(z_1 + q))$$

より,

$$\begin{aligned} \pi i(n+p)^2\tau + 2\pi i(n+p)(z_1 + q) &= \begin{cases} \pi i(n^2\tau + 2nz_1) & [p, q] = [0, 0] \\ \pi i((n+1/2)^2\tau + 2(n+1/2)z_1) & [p, q] = [1, 0] \\ \pi i(n^2\tau + 2n(z_1 + 1/2)) & [p, q] = [0, 1] \\ \pi i((n+1/2)^2\tau + 2(n+1/2)(z_1 + 1/2)) & [p, q] = [1, 1] \end{cases} \\ &= \begin{cases} \pi i n^2\tau + 2n\pi i z_1 & [p, q] = [0, 0] \\ \pi i(n+1/2)^2\tau + 2\pi i(n+1/2)z_1 & [p, q] = [1, 0] \\ \pi i n^2\tau + 2n\pi i(z_1 + 1/2) & [p, q] = [0, 1] \\ \pi i(n+1/2)^2\tau + 2\pi i(n+1/2)(z_1 + 1/2) & [p, q] = [1, 1] \end{cases} \end{aligned}$$

ここが分からない  $\vartheta_{[p,q]}(z_1, \tau) > 0$  となる. 以上により,  $w_1 < 0$  であることから  $c_w < 0$  となり符号が確定し,

$$w = - \frac{\vartheta_{[0,1]}(0, \tau)^2 \vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^2 \vartheta_{[0,0]}(z, \tau) \vartheta_{[1,0]}(z, \tau) \vartheta_{[1,1]}(z, \tau)}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^4 \vartheta_{[0,1]}(z, \tau)^3}$$

を得る. □



## 第 2 章

# Jacobi の周期公式

Theorem 2.0.1. (Jacobi's period formula)

$\tau \in \{\tau \in \mathbb{H} \mid -1 < \operatorname{Re}(\tau) < 1, |\tau - \frac{1}{2}| > \frac{1}{2}, |\tau + \frac{1}{2}| > \frac{1}{2}\}$  と  $\lambda(\tau) = \frac{\vartheta_{[1,0]}(0, \tau)^4}{\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^4}$  に対し,

$$\vartheta_{[0,0]}(0, \tau)^2 = F\left(\frac{1}{2}, \frac{1}{2}, 1; \lambda(\tau)\right)$$

が成立. ただし,  $F$  は Gauss の超幾何関数である.

## 参考文献

[今 15] 今野一宏. リーマン面と代数曲線. 共立出版, 2015.